



特集

ニコライ・ネフスキー

# 悲運の東洋学者

小樽高商の教壇に立った外国人教師は枚挙に暇がないが、中でもネフスキー（1892 - 1937）は、赴任期間の短さにもかかわらず、その学識の高さと、そしてとりわけ非業の最期により後世に強い印象を残した。今回の特集では、体制の犠牲となった少壮気鋭のロシア人東洋学者を採り上げる。

## 旺盛な研究活動と突然の悲劇

ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーがロシア語担当外国人教師として小樽高商に赴任したのは大正8年5月、27歳の時であった。既にその4年前に日本学専攻国費留学生として来日を果たしていた彼は、その間に起きたロシア革命のために帰国できなくなり、日本に安定した就職先を探していたのである。もっとも、小樽での在任期間は3年足らずに過ぎない。大正11年4月には、創設間もない大阪外国語学校（現大阪外国語大学）に転任したからである。しかし、その短い赴任期間にもかかわらず、ネフスキーはこの頃にアイヌ語及び宮古島方言の研究を開始しており、後の西夏語（中国西北部で900年ほど前に使用された言語）研究へと繋がる壮大な言語学研究の出発点であった重要な時期を彼は小樽で過ごしたことになる。また、私生活では、積丹の網元の娘萬谷イソと結婚したのも小樽高商時代であった。大阪で研究活動に没頭した彼の学名は次第に高まり、ついに昭和4年、ネフスキーは本国レニングラード大学助教授に招聘され帰国する。こうして前途洋々たる学生生活が目前に広がっていたかに見えた彼が、突然当局により逮捕されたのがその8年後の昭和12年10月であった。彼が「日本のスパイ」であるといういわれのない密告によるものだった。スターリン下にあった当時のソ連では、肅清の嵐が吹き荒れ、誰がいつ逮捕されてもおかしくない状況だったのである。妻イソも4日後に逮捕され、翌月に夫妻は銃殺刑に処せられた。暗黒の時代に飲み込まれ、非業の死を遂げたネフスキーの名誉が回復されたのは昭和32年のことである。



## ネフスキーの研究業績・その人となり

ネフスキーは、来日後東京で柳田国男、折口信夫、金田一京助らと交わり、日本民族学研究黎明期に参画した最初の外国人研究者として特筆すべき存在である。彼の民族学・言語学に関する研究は名誉回復後本国で非常に高い評価を受け、昭和37年には、ソ連最高国家勲章であるレーニン賞を没後受章している。彼が度々フィールドワークで訪れた宮古島では、生誕110周年にあたる平成14年に「ネフスキー顕彰碑」が除幕され、「ネフスキー通り」の歩き初めが行われた。ネフスキー関連の記念行事、出版は現在も途絶えることがなく、日本の地を踏んだ外国人教師中、最も豊富な研究業績を誇る一人がネフスキーであるといえよう。

ネフスキーは真に日本を愛した外国人だった。日本人女性を妻としたこと以外にも、日常和服を着用し、日本では和風の生活スタイルを貫いていた。言語的な天才でもあり、初めて訪れた宮古島では、いきなり宮古島方言で住民に話しかけ、聞く者を驚かせたという。授業では日本語を一切使わず、ロシア語のみで行い、厳格ではあったが、高商生のつけた語呂合わせ「寝婦好」をサインに用いるなど、ユーモア好きの魅力的な人柄も持ち合わせていた。それにしても、昨今巷に日本語を堪能に操る外国人はあまた見かけるようになったが、ネフスキーの日本語は、ほとんど奇跡的な領域にまで到達していたといえよう。以下に紹介する彼の文章は、ロシア人が書いたとはわかに信じがたいほどの流麗な美文である。

「ずっと以前のこと、かのシベリアの大鉄道を旅行して、私が丁度バイカルを過ぎたのは、麗しい6月の夜のことであった。天地に迫る涼味、寧ろ寒気が感ぜられる程で、威大な夜の光は、隈なく湖と程近く聳へる山々を輝し、水面には己が姿を映してゐた。」

（平凡社刊東洋文庫収録論文集「月と不死」冒頭部）

和書の書見に没頭するネフスキー。彼の日本文化への探求心は禪を着用するほどの徹底ぶりだった。（東京での留学生時代）